

第二項 特種機械水雷

第一目 序 説

前顯第一項ニ於テ概ネ一般的機雷ニ就キ述ブル所アリシガ本項ニ於テハ特種用機械水雷(機雷)ニ就キ
概述セントス

已ニ前項第二目三十七、八年戰役中ノ特種用途ニ對スル考案ニ就キ其ノ一部ヲ述ブル處アリシガ戰後

百事革新ニ際シ防禦兵器方面ニ在リテハ一般常用機雷スラ殆ド研究調査ノ目途ナキ狀況ニ置カレ此ノ種特種機雷ノ如キ又顧ミルノ餘裕ナカリシガ偶々世界大戰ノ突發ハ舊態依然タルヲ允サザルニ至リ海軍々令部長ハ我國機雷ノ一大進歩ヲ圖ルガ爲海軍大臣宛左記一號要領ノ商議ヲ爲シ尙之ト相前後シ海軍々令部次長ハ海軍技術本部長宛同二號要領ノ意見ヲ送付セル結果漸ク此ノ種機雷研究ノ機運ヲ招致シ海峡機雷、二重機雷、水中線機雷潜水艦用機雷、時限浮上機雷等ヲ出現スルニ至レリ

(一號)

大正四年機雷進歩促進ニ關シ海軍々令部長ヨリ海軍大臣宛商議要領

客年官房機密第五七八號ヲ以テ敷設水雷改良調査委員會ヲ設ケラレ爾來十有八箇月今ヤ現用機雷兵器ハ已ニ改良其ノ歩ヲ進メ機構上局部ノ缺點ヲ控除シ得タリト雖其ノ能力ノ點ニ於テ將亦確實ノ點ニ於テ之ヲ列國機雷ニ比スレバ尙不充分ノ點不尠依テ時勢ノ進運ニ適應セムガ爲更ニ一段ノ歩ヲ進メ優良ナル機雷ヲ案畫制定スルハ蓋シ刻下ノ急務ナリト信ズ而シテ尙後兵器獨立ノ必要上漸次廣ク範テ列國機雷ニ採リ其ノ實物ニ就キ之等兵器ニ關スル實驗ヲ施ス必要アリト認ム案ズルニ今尙歐洲ニ使用セラルル機雷ノ内最モ我國ノ現状ニ適スルモノハ毘社式機雷ヲ第一トシ「カレンダー」無繫維機雷ヲ第二トス蓋シ前者ハ有繫機雷中ノ白眉ニシテ効力大ニ且機能簡明働作確實殊ニ耐續ノ點ニ於テ納庫中及敷設後共現用機雷ニ勝ルコト充分ナリ又之ガ敷設裝置乃至敷設ノ方法ニ於テモ單ニ繫維器ノ幅員ヲ若干改造スルヲ以テ之ヲ現用平置式軌道ニ適用スルヲ得ルノミナラズ又直ニ現用我三、四、五號機雷ト混用シ得ルガ故ニ之ヲ實驗用トシテ若干購入ノ曉實用兵器トシテ使用セントスル場合ニ於テ其ノ便多大ナルモノアリ又後者即チ「カレンダー」機雷ハ無繫維無連繫ニシテ從來我海軍ニ於テ所有セザル性能ナレバ性質上ニ於テ一段ノ進歩ヲ認ムベキヲ以テ有益ナル參考兵器トシテ實驗ノ必要アルベシト信ズ

(二 號)

大正四年十月軍令部次長ヨリ技術本部長宛意見書要領

帝國海軍ノ實狀ト歐洲戰爭ノ教訓ニ鑑ミ左記機雷ヲ考案又ハ購入ノ必要アリト認ム

- (一) 所要海面ニ沈底シ所要調整期間ノ後自働的ニ浮揚シ普通ノ敷設状態トナル機雷
- (二) 獨潜機雷ノ一種又ハ八角少佐(三耶)案ノ如キモノ
- (三) 二重機雷
- (四) 獨式二重機雷ノ如シ
- (五) 潜水艦封鎖及防禦用トシテ急設敷設可能機雷
- (六) 機雷罐ヲ互ニ連繫シアル如キモノ(異深度ニシテ啓閉器式或ハ牽引發火裝置ヲ要ス)
- (七) 味方港灣ニ容易ニ敷設シ又容易ニ掃海(又ハ揚收)出來得ルモノ(毘式機雷ノ如シ)
- (八) 絶對ニ敵眼ヲ避ケ得ル水面下浮流水雷
- (九) 「レオン」機雷ノ如シ